

集英社版

世界文学全集

74

カフカ

ヴァルザー

審判／変身他

ヤーコフ・フオン・グンテン

訳 Ⅱ

立川洋三

城山良彦

柏原兵三

藤川芳朗

集英社

集英社版 世界文学大系集 74

審判／変身 他
ヤーコプ・フォン・グンテン

一九七八年十二月二十日 印刷

一九七九年一月二十五日 発行

訳者 立川洋三／城山良彦／柏原兵三

藤川芳朗

編集 株式会社 綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一番五
電話(〇三)二三九一三八一

発行者 堀内未男

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
電話 出版部(〇三)二三〇一六三六一
販売部(〇三)二三八一七七八一

印刷所 凸版印刷株式会社

目次

カフカ

審判

立川洋三訳

3

変身

城山良彦訳

191

流刑地にて

柏原兵三訳

235

ヴァルザー

ヤーコプ・フォン・グンテン

藤川芳朗訳

265

後記

389

解説

藤川芳朗

391

年譜

401

審 判

1 逮捕、ブルーバハ夫人との会話、
ビュルストナー嬢

だれかヨーゼフ・Kを誹謗した者がいるにちがいない。なにも悪事を働かないのに、ある朝、逮捕されたからである。彼に部屋を貸しているブルーバハ夫人の料理女も、いつもは八時ごろに持ってくる朝食を、この日にかぎって持っていかなかった。これまで一度もなかったことだ。Kはなおしばらく待ってみた。そのあいだ、枕に頭をつけたまま向かいの家に住む老女が、彼女にしては珍しい好奇のまなざしで彼を眺めているのを見ていたが、やがて、不審と空腹にかられてベルを押した。すぐにノックの音が聞こえ、この家でまだ見たことのないひとりの男がはいってきた。痩せぎすだが、頑丈な体つきの男で、ぴったりと合った黒い服を着ていた。それは旅行服のように、あちこちにひだやポケットや留金やボタンがついていたうえ、バンドも一つついていたので、なんのために着るものかはわからな

くても、ひどく実用的な服らしく見えた。

「どなたです？」と聞くがはいいか、Kは半分ほどベッドの中で身を起こした。

が、相手の男は、まるで自分の出現を受けいれろといわんばかりに、Kの質問を無視して、ただこううそぶいたのだ。

「ベルを鳴らしましたね？」

「アンナに朝食を持ってきてもらいたいんですよ」と、Kは言い、まずは黙ったまま、注意ぶかくよく考えたうえで、この男が何者であるかをたしかめようとした。

しかし、相手はそう長いことKの視線に自分をさらさないうで、扉のほうへ向くと、それをちよつと開けて、そのすぐうしろにいるとおぼしい人間に声をかけた。

「アンナに朝食を持ってきてもらいたいんだってよ」

隣室でかすかな笑い声したが、その響きぐあいでは、数人の人がそれに加わっているのかどうかは判然としなかった。それによって見知らぬ男が、これまで知らなかったことを知ったはずもなかった。それなのに、彼はなにか通告するような口調で、

「だめですね」とKに言った。

「おかしいなあ」と、Kは言うど、ベッドから飛びおりて、急いでズボンをはいた。「とにかく隣にどんな人があるのかわかります。そして、ブルーバハさんがぼくにたいする

こういう妨害にどう責任をとるかも」

彼は、こんなことは口に出さなくてもよかった、そうしたばかりに、この見知らぬ男の監視権がある程度認める結果になってしまった、とすぐ気がつきはしたが、それもうたいしたこととは思われなかった。なにしろ相手もおなじ考えだったらしく、こういうふうに言ったからだ。

「ここにいるほうがいいと思いいじゃないですか？」

「いや、ぼくはここにいたくも、あなたが話しかけられたくもないんです。あなたが身分をあきらかにしないかぎり
はね」

「好意だったんですがね」と、見知らぬ男は言つて、自分からすすんで扉を開けた。

その隣室へ、Kはやる心をおさえてゆっくりと足を踏み入れたが、一見したところ、そこはまえの晩とほとんど変わらないように見えた。グルーバハ夫人の居間なのだが、その家具や敷物や花瓶や写真でいっぱいかびの部屋が、今日はいつともより閑散としてゐるらしいのに、そのことはすぐには見ぬけなかった。ひとりの男が開いた窓のそばにすわつて本を読んでいるのが、その部屋の大きな変化だっただけに、なおさら見ぬけなかったのである。と、その男が書物から目を上げて、

「自分の部屋から出てきてはいかんよ。フランクがそう言わなかったかね？」

「なるほど、それであなたはどうしようというんです？」と、Kは言つて、この新たに知った人物から、扉のところ
に立ちどまつているフランクと呼ばれた男のほうへ目をうつし、それからまた視線をもどした。開いている窓こしにまた例の老女が見えたが、彼女はいかにも老人らしい好奇のまなざしで、ここから真向かいに当たる窓べに歩みよつて、その後のなりゆきを見とどけようとしていた。

「ちよつとグルーバハさんに——」と言つと、Kはふたりの男から身をもぎ離すような動作をしたが、ふたりとも実際にはずつと離れたところにいたので、そのまま先へ行こうとした。

「いかん」と、窓べの男が言つて、本を小卓の上に投げながら立ちあがつた。「行つてはいけない。きみは逮捕されただから」

「そんなようすですわね」とKは言い、「いったいどういふわけで？」とつづいて聞いた。

「きみにそんなことを言うようにはおおせつかつていないんだ。部屋へ行つて、待つていてくれたまえ。訴訟手続きはもうとられてゐるんだから、時が来ればきみにも万事知らされるだろう。きみにこれほど友好的に話すのは、命令の逸脱になるんだが、フランク以外にはだれも聞いていないと思うし、この男はきみのためなら規則違反も辞さないんでね。これから先も、こういう監視人がきまつたときの

ような幸運に恵まれたら、きみは安心していられるわけだ」

Kはすわろうと思ったが、窓ぎわの椅子のほかには、部屋じゅうどこにもすわるものがないことに気がついた。

「いまに万事まちがいないことがわかるさ」と、フランクが言いながら、もうひとりの男といっしょに彼のほうへ歩いてきた。とくに後者のほうがKよりもいちじるしく背が高く、なんども彼の肩をたたいた。それからふたりでKの寝巻を検分しつつ、これからはずっとひどいシャツを着せられるだろうが、この寝巻はほかの下着といっしょに保管しておいてやって、事が有利に解決したら、また返してやろう、などと話した。

「持物は倉庫にあずけるよりわれわれに渡したほうがいい」と、ふたりは言った。「倉庫ではよく横領されてしまうばかりか、ある期間が過ぎると、問題の訴訟が終わろうが、終わるまいがおかまいなく、一切合切売りとばされてしまうからね。それに、こういう訴訟はじつに長びくんでね、とくに最近は。もちろん、そのときは倉庫から売上金ももらえるんだが、この売上金の額をきめるのが、出された品の多寡ではなくて賄賂しだいというわけだから、それが第一もともとすくないときてうるうえに、長年かかって手から手へと渡されていくうちに、そういう売上金が減ってしまうのがふつうなんだ」

Kはこのような話にはほとんど注意を払わなかった。たぶんまだ自分の財産をどうしようとする勝手だろうが、そんなものはたいして重んじていなかったし、自分の状況をすっきりさせることのほうが、いまははるかにたいせつだったのだ。しかし、この男たちといっしょでは考えをめぐらすことさえできなかった。二番目の監視人——實際ただの監視人でしかなかった——の腹がなんども文字どおり友好的にぶつかってくるからだ。目を上げてみると、大きな鼻がわきへねじれた、この太った図体にはまったくそぐわない、かさかさの骨ばった顔が、彼の頭ごしにもうひとりの監視人と話しあっているのが目にはいった。こいつらはいったい何者だろう？ なんの話をしているのだろうか？ なんとという役所の者だろう？ ここは法治国で、国じゅうに平和が支配し、すべての法律がちゃんと存続しているのに、あえておれの住居でおれを襲ったのは何者であろう？ Kはいつも、すべてをできるだけのんきに考え、最悪のことでも、それがはじまってから信じ、すべてが危急を告げていても、将来のことはまったく頓着しない、という傾向であった。だが、いまのばあいは彼にもそれは正しくないように思われた。この全体は冗談、なにか未知の理由から、たとえば、今日が彼の三十歳の誕生日だからかもしれないが、銀行の同僚が計画したわるふざけだと思えることもできた。もちろんそういうことがあるかもしれず、なんとか

監視人たちに面と向かつて笑ってやりさえしたら、彼らもいっしょに笑いだすことになるかもしれない。たぶんこの連中は町角の使い走りであろう。そのように見えないこともない——が、それにもかかわらず、彼は今日にかぎって、フランツという監視人をはじめ見たまきにそのときからおそらく彼がこの連中にたいしてもっているだろう極小の利点でも手放すまい、と心にきめていた。あとで、あいつは冗談を解さなかった、と人に言われるだろうという点では、かすかな危惧を覚えぬではなかったが——経験から学ぶなどということは彼のいつもの習慣ではなかったにもかかわらず——二、三の、それ自体ではとるにたりない出来事を思いだしたので。つまり、自覚のある友人たちとは違つて、起こりうる結果をすこしも予感せず、不注意な態度をとつて、そのために結果によつて罰せられた、というような出来事である。そんなことは二度と起こつてほしくないし、せめて今回だけでも起こらないでほしかったが、喜劇なら、それに加わろうという気持はあつた。

まだ彼は自由であつた。

「失礼しますよ」と、彼は言うのと、ふたりの監視人のあいだをすりぬけて自分の部屋へ急いだ。

「ものわかりがいいらしい」と、背後で言う声が聞こえた。が、部屋にはいると、彼はすぐに書きもの机の引出しを開けた。そこはすべてきちんとしていたが、身分証明書だけ

は、興奮のためか、いくら捜しても、すぐには見つからなかった。そのうちやつと自転車証明書が見つかったので、それを持つて監視人たちのところへ行きかけたが、その書類ではどうもふじゅうぶんのようには思えたため、さらに捜しつづけると、ついに出生証明書が出てきた。そこで彼はまた隣室へもどつたが、そのときちょうど向かいの扉が開いて、グルーバハ夫人がそこへはいるうとしていた。もつとも、彼女の姿はほんの一瞬しか見えなかった。Kを認めると、あきらかに狼狽したようすで、ごめんなさいと言いつつながら姿を消し、ひどく静かに扉を締めてしまったからだ。「おはいりなさいよ」と、Kはどうにかまだ言うことができた。だが、書類を持つて部屋の真ん中に立つたまま、二度と開かない扉をじつと見ていると、監視人たちに声をかけられて、はつとようやくわれに返つた。彼らは窓への机にすわつていたが、Kの朝食を食べていることが彼にもわかつた。

「なぜ彼女はいらなかったのですか？」と、彼は聞いた。「はいつてはいけないんだ」と、大きいほうの監視人が言った。「それはきみが逮捕されているからだよ」

「どうして逮捕なんかされてるはずがあります？　しかもこんなやりかたで？」

「またはじまつたね」と、その監視人はバターパンを蜜の壺にひたしながら言った。「そんな質問には答ええないよ」

「いずれ答えなければならぬでしょう」と、Kは言った。「これがぼくの身分証明書です。さあ、あなたがたのを見てください。なによりもまず逮捕状をね」

「いやはや」と、監視人が言った。「自分の立場に順応できないで、こともあろうに、いまきみのまわりの人間の中でいちばん身近なわれわれを、いたずらに怒らせようとこ執心らしいじゃないか！」

「そうなんだ、いいか」と、フランツも言つて、手にしていたコーヒ―茶碗を口もとへ運ぶかわりに、しげしげと、いかにも意味ありげな、しかしなんとも不可解なまなざしでKをにらんだ。Kは思わずフランツと視線をかちあわす羽目になったが、やがて、書類をたたいて、

「これがぼくの身分証明書なんだ」と言つた。

「それがどうしたというんだ？」と、大きいほうの監視人がすぐさまきんだ。「きみの態度は子供よりひどい。いったいどうしてほしいんだ？ われわれ監視人と身分証明書だの、逮捕状だのことで議論して、それできみのともうもなくなたいへんな訴訟をきつと片づけようとも思っているのか？ われわれは下っ端で、身分証明書のことなんかわからないし、きみを毎日十時間ずつ見はってその報酬をもらうということ以外、きみとはなんの関係もないんだ。われわれはそれだけの人間なんだが、それでも、われわれが仕えている役所のお偉がたは、こういう逮捕を指令

するまえに、逮捕の理由や逮捕される人間の身もとをことこまかく洗うもんだ、というぐらいのことを理解する能はあるさ。それに誤りなんかありゃしない。おれの知るかぎり、といつても、おれはいちばん下っ端しか知らないが、われわれの役所は、まさか住民の中に罪を捜すんじゃないくて、法律にもあるとおり、罪にひきつけられて、その結果われわれ監視人を派遣せざるをえないんだ。それが法律というものだ。そのどこに誤りがあるっていうんだ？」

「そんな法律は知りませんね」と、Kは言つた。

「そうすると、なおわるいんだ」と、監視人が言つた。

「そんなのはきつと、あなたがたの頭の中じゃないんですよ」と、Kは言つた。なんとか監視人の考えの中にもぐりこんで、それを彼の都合のよいほうへ向けるか、それと同化するかしようと思つたのだ。しかし、監視人はただはねつけるように言いかえた。

「いまに痛い目を見るだろうよ」

すると、フランツも割りこんで、

「ほら、ヴィレム、こいつは法律を知らないとお白状しながら、それでも自分は罪がないと言いはってやがるよ」

「まったくそのとおりだが、こいつにはなにひとつわからせることはできないんだ」と、もうひとり言つた。

Kはもうなにも答えなかった。こんな下っ端役人——彼ら自身がさうだと白状している——のおしゃべりで、これ

以上ひっかきまわされる必要があるか、と彼は考えた。いずれにせよ、こいつらは自分でもわからないことをしゃべっているのだ。泰然としているのはばかだからこそではないか。おれと対等の人間とすこし言葉をかわせば、こんな連中といつまでも話しているより比較にならぬぐらい、万事がはつきりしてくるだろう。Kは二、三度、部屋の中のあいているところを歩き来したが、窓の向こうに、例の老女がさらに老いばれた老人を窓べに引っぱってきて、抱きかかえるようにしているのが見えた。こんな見せ物にされてたまるものか、とKは思つて、

「ばくをあなたがたの上役のところへ連れていってください」と言つた。

「上役がそうしろと言えね。それまではだめだよ」と、ヴィレムと呼ばれた監視人が言い、「それからきみに言つておくが」とつけ加えた。「いまは部屋へ帰つて、おとなしく指示があるのを待つことだ。つまらぬ考えごとで気を散らさないで、じつと心をおちつけていたまえ、そのうち重大命令が下されるから。きみはわれわれを、われわれの好意にふさわしいようにはあつかわなかつた。われわれはどれくらい人物ではないとしても、少なくともいまはきみの前にいる自由な人間だ、ということをおぼれているんだ。これはけつして小さな優越じゃないぜ。だが、それでも、きみに金があれば、外の喫茶店からかい朝食を持ってきて

やつてもいいんだよ」

この申し出には答えないで、Kはしばらくじつと立っていた。隣の部屋の扉、いや、控えの間の扉を開けたからといって、まさかこのふたりはあえて阻止しないだろう。とことんまでやってみるのが、事のもっとも簡単な解決法であるにちがいない。だが、ふたりはあるいは襲いかかつてくるかもしれない、そうして一度なぎ倒されたら、現在ある点で彼らにたいして保持している優位がすっかり失われてしまうのだ。こういうわけで、彼は自然のなりゆきがもたらしてくれるはずの安全な解決を選んで、自室へひきあげた。彼も監視人も、もはや一言も発しなかつた。

彼はベッドに寝そべると、洗面台に手を伸ばして、ゆうべ朝食にとどつておいたみごとな林檎を取つた。いまはそれだけが彼の朝食であつたが、まず大きくかじつてみてたしかめたところでは、監視人たちのお情けで手に入れられるという、あのきたならしい深夜喫茶店の朝食よりは、はるかにましであつた。彼はさっぱりと、安らかな気分になつた。銀行では午前中の仕事を休むわけだが、彼がそこで占めているかなり高い地位からいえば、簡単に弁解のできることだ。いつわりのない弁解をすべきだろうか？ 彼はそうしようと思つた。このようなばあいによくあることだが、彼の言うことが信じてもらえなければ、グルーバハ夫人か、あのふたりの老人、向かい側の窓のところへ行進し

つつあるにちがいない老人たちを、証人として呼ばばいい。それにしても、監視人が彼を部屋へ追いやって、いくらでも自殺できる道のあるところにひとりほうっておくのは、Kには不思議だった。少なくとも監視人たちの考えの筋道からいって不思議に思われた。もちろん、彼は同時に、こんどは彼自身の考えの筋道からいって、自殺するどんな理由があるだろうか、と自問してみた。あのふたりが隣室にすわっていて、彼の朝食を平らげてしまったから、とでもいうのか？ 自殺などということばがけたことだから、たとえそうしようと思っても、そのばかりしさのために実行することはできないだろう。もしも監視人たちの頭の足りなさがあんなにひどくなかったら、彼らが彼をひとりほうっておくことに危険を認めなかったのも、おなじ確信のためものと考えることができたらう。さあ、監視人さん、おれが上等のブランドーのしまつてある壁戸棚のところへ行つて、まず一杯目は朝食がわりに飲みほし、二杯目は元気づけのためと思つて飲むさまを、見たければ勝手に見物するがよい。もっとも、二杯目のほうは、そういう必要があるという、およそありそうもないばあいにたいする用心からにすぎないのだが。

そのとき、隣室から呼びかける声がしたので、彼は歯をグラスにぶつけるほどびっくりした。
「監督が呼んでいる！」と言つたのである。ただこれだけ

のさけび声に彼は驚いたのだが、こういう短い、ぶつきらばうな軍隊調の声は、とても監視人フランクツのものとは思えなかった。が、命令そのものはきわめて歓迎すべきものであった。

「とうとうおいでなすつた！」と、彼はさけびかえすと、壁戸棚を閉めて、すぐに隣室へと急いだ。そこには先のふたりの監視人が立っていて、当然だといわんばかりに、彼をまたもとの部屋へ追いやつた。

「なんてことだ」と、彼らはさげんだ。「寝巻で監督の前へ行こうっていうのか？ さんざんたたきのめされるぞ、われわれまでいっしょに！」

「ちえつ、いい加減にしてくれよ！」と、すでに衣装簞笥^{だんす}のところまで押しもどされていたKはさげんだ。「寝こみを襲つておいて、盛装しておれとは虫がよすぎる」

「そんなこと言つたつてだめさ」と、監視人たちが言つたが、彼らはKがわめきさげぶと、ひどく静かに、いや、ほとんど悲しげになって、それで彼を当惑させたり、いくらか正気に返らせたりするのだった。

「ばかげたもつたいぶりようだ」と、Kはなおつぶやいたが、すでに上着を椅子から取りあげ、まるで監視人たちの批判をおおぐようなふうに、しばらくそれを両手でかかえていた。ふたりは頭を振つて、

「黒い服でなくちゃいかん」と言つた。そこでKはその上

着を床に投げつけ、どんなつもりで言ったのか、自分でもわからぬままに口ばしした。

「まだ本審理じゃないじゃないか」

監視人たちはにやっと笑ったが、「黒い服でなくてはいいかん」という意見は変えなかった。

「それで事がはやくすむのなら、それでもいいですがね」と、Kは言うど、自分で衣装箆を開け、長いことたくさん服をかきまわして、最上等の黒い服を選んだ。びったりとした仕立てのために知人たちのあいだで評判になった上着である。それから、別のシャツも引きだして、入念に着つけをはじめた。監視人たちが風呂へはいれと命ずることを忘れたおかげで、事がはやく片づいた、と彼はひそかに思った。もしかしたら彼らはそれを思いだすのではないか、とようすをうかがってみたが、もちろんぜんぜん思いつかなかったようだ。そのかわり、Kは着かえています、という報告をもたせてフランクを監督のもとへ派遣するのを、ヴェレムは忘れなかった。

すっかり服を着おえると、Kはヴェレムにびったりとつき添われて、からっぽの隣室から、扉が両側ともすでに開かれていますの部屋の部屋へ連れていかれた。この部屋にはすこしまえからタイピストのビュルストナー嬢が住んでいることは、Kもよく知っていた。いつも勤めに出かけるのはやく、また帰宅もおそいので、Kとは挨拶のほかにはあ

まり言葉をかわしたことがない人である。いまは、そのビュルストナー嬢のナイト・テーブルが、ベッドのわきから部屋の中央へうつされて審理用の机になっていて、監督がその向こうにすわっていた。脚をくみ、一方の腕を椅子の背にかけてすわっていたのだ。

部屋の隅には三人の若者が立っていて、壁にかかるマップトにはあるビュルストナー嬢の写真を見ていた。開いている窓の取っ手には、白いブラウスが一枚かけてあった。向かい側の窓にはまたふたりの老人が見えたが、仲間がまえよりもふえていた。ふたりのうしろにずっと背の高い男がひとり胸をはだけたシャツ姿で立って、赤みがかったちよびひげを指で押えたり、ひねったりしていたからである。「ヨーゼフ・Kか？」と、監督が聞いた。たぶん、Kのぼんやりした視線を自分に向けさせるためにすぎなかったのであろう。Kはうなずいた。

「今朝の出来事でさぞかしびっくりしたことだろうね？」と、監督は聞いたが、そう言いながら、ナイト・テーブルの上にのっている、ロウソクとマッチ棒、本と針刺しといったわずかな品物を、まるで審理に必要なものであるかのように、両手でひき寄せた。

「もちろんです」と、Kは言った、ようやくもののわかる人間と向かいあって、自分が当面する問題について話しあえるのだ、という喜びにひたりながら。「たしかにびっくり

りはしましたが、けっしてひどくびくりましたというわけではありません」

「ひどくびくりましたわけではない？」と、監督は聞きかえすと、ロウソクを小卓の真ん中に立てて、そのまわりにほかの品物をならべた。

「いえ、誤解なさっておられるようです」と、Kはあわてて言いさした。「つまりですね」——ここでKは言葉を切

って、椅子はないかとあたりを見た。

「すわってもいいですか？」と、彼は聞いた。

「いけないね」と、監督は答えた。

「つまりですね」と、Kはそれから先は休まずに言った。

「つまり、ひどくびくりましたのですが、三十にもなつて、わたしみたいにひとりで生きていかなければならないとなると、不意打ちには慣れてしまつて、たいして苦にしくなるものなんです。とくに今日のような事件は」

「なぜ今日のような事件がとくにそうなのか？」

「わたしは事柄全体を冗談だと見ている、というつもりはありません。冗談にしては、用意された道具立てがおおげさすぎるように見えますからね。下宿の住人全部と、あなたがたまでが加わっておられるようですが、そうなることも冗談の範囲を越えているのではないですか。ですから、冗談なんて言うつもりはありませんよ」

「そのとおりだ」と、監督は言いながら、マッチが何本マ

ツチ箱の中にあるかを調べていた。

「ですが、もう一方では」と、Kはつづけながら、すべての人に言葉を向けた。写真を見ている三人の注意さえひきつけたかった。「もう一方では、この事件はたいした重要性をもっていないません。わたしがそう結論するのは、わたしは告訴されたとはいえ、告訴されるような罪はまったく見つけられないからなのです。しかし、それも副次的なこと、第一の問題は、だれがわたしを告訴したのか、ということ。どの役所が訴訟手続きをとっているのか？ そしてあなたがたは役人なのか？ あなたがたの服、それはどう見ても旅行服ですが、それを制服だと言いはるのでなければ」——ここで彼はフランツのほうを向いた——「どなたも制服を着ておられません。まずこういう疑問をあきらかにしていただきたいと思ひます。それがはっきりすれば、おたがい気持ちよくお別れすることができ、とわたしは信じてますので」

監督は打ちつけるようにマッチ箱を机の上に置いた。

「きみはたいへんまちがっている」と、彼は言った。「ここにいる連中もわたしも、実はきみの事件にとつてはまったく枝葉の存在、というより、われわれはそれをぜんぜん知らないといつていいんだ。われわれがちゃんとした制服を着たところで、それだけきみの事件がわるいというわけのものじゃない。だいたい、きみが告訴されている、とわ

たしは言うこともできなければ、およそ告訴されているのかどうかさえ、知らないといったほうがいいんだ。きみが逮捕された、ということはたしかで、それ以上のことは知らないのだ。もしかしたら監視人たちが違ったことを言ったかもしれないが、そうだとしたら、それはただのおしゃべりだよ。そういうわけで、わたしはきみの質問には答えないけど、われわれのことや、これからきみに起こることには気を使わないで、むしろきみ自身のことを考えたらどうだ、そう忠告することはできる。自分は潔白だ、という気持でそうそう騒ぎたてないほうがいい。ほかの点できみが与えている、とくにわるくない印象をぶちこわしてしまふからね。それから、口をもっとつつしんだらどうだろう。さつきみが言ったことは、ほんの二、三言にとめておいても、ほとんど全部きみの態度からわかったことだし、それにきみにとっておおいに有利なものでもなかったじゃないか」

Kはじっと監督を見た。年下らしい男からいまさら拘子（きょうし）定規の説明をされるとは、腹藏なく語ったためにケチをつけられるのか？ しかも、逮捕の理由も、逮捕請求者のことも、まったく聞かされていないではないか。彼はいささか興奮してしまつて、だれもとめないのをいいことに、あちこち歩きまわりながら、カフスをひっこめたり、胸をなでたり、髪の毛を直したりしたほか、たまたま三人の男の

そばを通りすぎるとき、

「まったくばかげてやがる」と言いすてもした。

すると、三人は彼のほうへ向きなおつて、好意的とはいへ、しかつめらしい目つきで彼を見つめたが、彼のほうは監督の机の前まで来て、ようやくまた足をとめた。

「ハステラー検事は親友なんですが」と、彼は言った。

「電話をしてもいいでしょうか？」

「いいとも」と、監督は言った。「だが、それにどんな意味があるのか、わたしにはわからないね。なにか個人的な用件で話さなければならぬのではないかぎりには」

「どんな意味ですって？」と、Kは腹だたしいというよりはあきれはててきけんだ。「いったいあなたは何者です？ 意味を知りたがりながら、この世でもっとも無意味なことをやっているじゃありませんか？ 石をやわらかくするぐらい無意味じゃないですか？ この人たちも、はじめはわたしを襲ったくせに、いまはあちこちに立ったりすわたりしたまま、わたしがあなたの前で高等馬術をするのを見えます。あなたがたによれば、わたしは逮捕されているというのに、検事に電話をかけるのが、どんな意味をもつか知らないんですか？ よろしい、電話はしませんよ」

「しかしまあ」と、監督は言つて、電話のある控えの間のほうへ手を伸ばし、「どうぞ、電話してください」

「いえ、もうけっこうです」と言つと、Kは窓のところへ